

# スポーツボランティア研修会 テキスト

## 第1章 スポーツボランティアとは

<b>1</b>	<b>スポーツボランティアについて</b>	
1-1	ボランティアとは	1
1-2	スポーツとは	1
1-3	スポーツボランティアの定義	2
<b>2</b>	<b>スポーツボランティア活動について</b>	
2-1	スポーツボランティアの分類	3
2-2	スポーツボランティアが生み出す付加価値	4
<b>3</b>	<b>スポーツボランティアの楽しみ方</b>	
3-1	スポーツボランティアのやりがい	5
3-2	チームとしてのスポーツボランティア	6

## 第2章 スポーツボランティアに関する社会状況

<b>4</b>	<b>スポーツボランティアの統計</b>	
4-1	成人のスポーツボランティア実施状況	7
4-2	青少年のスポーツボランティア実施状況	9
4-3	スポーツライフの現状	10
<b>5</b>	<b>スポーツボランティアと多様性</b>	
5-1	ダイバーシティ&インクルージョン	11
5-2	スポーツボランティアにおけるダイバーシティ	12
5-3	ダイバーシティと障害者スポーツ	12
5-4	障害者スポーツの起源	13
5-5	障害者スポーツの可能性	14
5-6	障害者スポーツの国際大会	16

## 第3章 スポーツボランティアに必要なスキル

### 6 コミュニケーションスキル

6-1	アイスブレイク	17
6-2	リーダーシップ	18
6-3	フォロワーシップ	18

## 第4章 日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)について

### 7 JSVNについて

7-1	設立意義と目的	19
-----	---------	----

### 8 主な事業

8-1	スポーツボランティア養成事業	20
8-2	コーディネート事業	21
8-3	スポーツボランティア周知・啓発事業	21

### 9 スポーツボランティア養成プログラムの概要

9-1	スポーツボランティア養成プログラム	22
9-2	更新講習	22
9-3	講師・指導者制度	22

# スポーツボランティアとは

## 1 スポーツボランティアについて

### 1-1 ボランティアとは

ボランティアとは、「自主（自発）性、公益（社会、公共）性、無償性」に基づく社会的活動、または活動に参加する人のことである。また、社会で必要とされているが、まだ実現されていない欲求を満たすという点で「先駆（先見、創造、開拓）性」や、一過性でなく継続的に活動を行うという意味で「継続性」も加わる。

英語のボランティア（volunteer）の語源は「志願兵」であり、現在も本来の語義通り「志願兵」や「義勇兵」の意味でも使われている（対義語はdraft：「徴集兵」）。歴史的には、騎士団や十字軍等の宗教的意味を持つ団体にまで遡ることができ、ラテン語のvolo（ウォロ：「意思、決意、願望」の意味を持つ英語willの語源）に関係するといわれている。なお、ボランティア（voluntary）とは、「自発的であるさま」のことである。

### 1-2 スポーツとは

英語のスポーツ（sport, sports）の語源は、「運ぶ」という意味のラテン語deportareだと言われ、「日々の生活から離れる」「気晴らし」「休養する」「遊ぶ」等を指す言葉であった。

スポーツとは、“名辞（めいじ）であるが物的存在ではない”（名辞：言語によって表現された概念のこと）と説明されることがある。あるいは、“その言葉（スポーツ）は存在のない現象である”、“競技スポーツ種目の総称である”等とも表現される。スポーツという言葉は、その境界について科学的な分析がなされ、はっきり決められているわけではなく、明確な定義は難しい。

近年では、チェスやダーツ、キャンプ活動等も「スポーツ」に含まれる。また、eスポーツというバーチャル（仮想現実空間）形式のゲームも盛んになっており、テレビモニターに向かい座った状態でコントローラーを操作する活動が、「スポーツ」に該当するのか議論が分かれることがあるが、「余暇」という意味ではスポーツに定義され、またゲームを楽しむためにトレーニングをしたり、集中力を高めたりする行為は、他の競技系スポーツと同様であるため、今後はスポーツボランティアの対象となる可能性を秘めている。

### 1-3 スポーツボランティアの定義

スポーツボランティアの定義としては、以下のようなものがある。

「スポーツという文化の発展のために金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人（活動）のこと」  
(日本スポーツボランティア・アソシエーション2004)

「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」

(文部省（現・文部科学省）スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議  
「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書」2000)

これらを踏まえ、日本スポーツボランティアネットワーク（JSVN）では、スポーツボランティアを下記のように定義する。

「スポーツボランティアとは、自主性、公益性、無償性に基づき、運動や競技を含めた多くの余暇活動をささえる人、または活動のことである」

スポーツ以外を対象とするボランティア活動が今後、増えてきた場合でも、ボランティア活動の原則は普遍的であると考えられるが、スポーツボランティアの対象となる「スポーツ」は、オリンピック・パラリンピックに新しい競技が加わるのと同様に、今までなかった活動がスポーツボランティアの対象として、今後増えてくることが予想される。

スポーツとして新しい競技や種目が増え、そのスポーツを楽しむ人が増えていくに従い、そのスポーツをささえる人が必要になってくる。これからも、誰もが様々なスポーツを楽しむことができる寛容な社会を作っていくためにも、スポーツボランティアは非常に重要な役割を担っていると同時に、スポーツボランティアを楽しむ機会を創出していくことが、スポーツボランティア活動の醍醐味でもある。

## 2 スポーツボランティア活動について

### 2-1 スポーツボランティアの分類

スポーツボランティアは役割やその活動内容から、大きく3つに分類することができる。

#### ●クラブ・団体ボランティア・・・定期的な活動

クラブ・団体ボランティアは、地域スポーツクラブやスポーツ団体におけるボランティアを指しており、日常的で定期的な活動といえる。具体的には、地域のスポーツ少年団やママさんバレーボールチーム等で監督やコーチを務める「ボランティア指導者」が考えられる。これには、監督やコーチが指導する際の指導アシスタントも含まれる。また、クラブや団体の役員や幹事、練習時に給水等を担当する世話係、競技団体役員等の「運営ボランティア」も、クラブ・団体ボランティアに位置づけられる。

#### ●イベントボランティア・・・不定期な活動

イベントボランティアは、地域における市民マラソン大会や運動会、さらには国体や国際大会をささえるボランティアを指しており、その多くは不定期な活動である。イベントボランティアのうち、専門的な知識や技術が必要な「専門ボランティア」としては、審判員や通訳、医療救護員、データ処理、大会役員等があげられる。「一般ボランティア」には、特別な技術や知識が不要で、誰にでも容易に関わることができる給水・給食、案内・受付、記録・掲示、交通整理、運搬・運転、そして選手の滞在・訪問を受け入れるホストファミリー等がある。

#### ●アスリートボランティア・・・トップアスリートやプロスポーツ選手による活動

現役・OBのプロスポーツ選手やトップアスリートによるアスリートボランティアは、オフシーズンに福祉施設を訪ねたり、ジュニアのスポーツ指導や地域のイベントに参加したりする社会貢献活動である。プロ野球選手やプロサッカー選手の活動はもとより、最近ではさまざまな種目のトップアスリートが一般社団法人やNPO法人等を組織し、活動するケースが増えている。

総合型地域スポーツクラブ(総合型クラブ)の普及やイベントの多様化、国際的なスポーツイベントの開催等により、スポーツボランティアの果たす役割は、今後さらに重要になるであろう。

#### Column I スポーツボランティア活動の実例

2019年に開催されたラグビーワールドカップ2019日本大会(以下、RWC2019)で、スポーツボランティアは「街なか&ファンゾーンガイド」「会場内観客サービス」「フリーサポート」「輸送サポート」「関係者パス発行サポート」「VIP対応」「メディアサポート」「テクノロジーサポート」「ケータリングサポート」「会場運営サポート」「スタッフサポート」「ライツプロテクションスタッフ」の12種類の活動を行った。いくつかの活動内容を以下に紹介する。

「街なか&ファンゾーンガイド」……スタジアム外で観客の案内、もてなしなど、大会の特別な雰囲気作りを担った。

「フリーサポート」……大会ゲストや審判団などの送迎を行うドライバーを務めた。

「輸送サポート」……駐車場内に到着したゲストをスタジアムまで案内した。

「メディアサポート」……メディアが過ごすラウンジやワークスペースの運営補助を行った。

簡易な通訳、食事や飲み物の準備など、メディアの要望に応じて柔軟に動いた。

「ケータリングサポート」……大会関係者(主にボランティア)への弁当の受け取り、配布、管理を行った。

「ライツプロテクションスタッフ」……スタジアム内外でアンブッシュマーケティング(スポンサー以外の企業が、大会に便乗して宣伝活動を行うこと)が行われていないか、パトロールした。

資料:日本スポーツボランティアネットワーク「ラグビーワールドカップ2019日本大会公式ボランティアプログラム『NO-SIDE』活動レポート」

## 2-2 スポーツボランティアが生み出す付加価値

前述したように、スポーツボランティアは活動によって役割が異なり、また今までの活動では存在しなかった新しい役割が求められることも多い。活動は多岐にわたるが、そのいずれにも共通していることとして、スポーツボランティアは単なる労働力ではなく、主催者と共に活動やイベントを作り上げる存在だということがある。

例えば、東京マラソンではボランティアを「東京マラソンを支えるボランティアはホスピタリティあふれる東京マラソンの象徴のような存在」と位置づけており、ワールドラグビーでは「Faces of the Tournament (大会の顔)」と位置づけている。

スポーツボランティアは主催者と参加者、観客等をつなぐ存在であり、ボランティアの活動によって関係者の印象は大きく変化する。例えば会場の受付や案内を行うボランティアが選手や観客に笑顔でホスピタリティのある接し方をすれば、選手や観客は好印象を抱くが、反対に元気がなくそっけない対応では悪印象を与えてしまう。そしてその印象はスポーツボランティアそのものだけではなく、活動やイベントの成功・失敗にも影響を与える。

スポーツボランティアは、活動やイベントをさらに充実したものへと変える力を持つ、いわば付加価値を生み出す存在であるといえる。

### Column II 運営者が感じたスポーツボランティアの力

RWC2019組織委員会のスポーツボランティア担当者は、ボランティアが持つ可能性について以下のように語っている。

「運営側とボランティアのマインドセットや目標としているものが一緒になれば、本当に可能性は無限大です。特にRWC2019の雰囲気は、ボランティアの方が作ってくださったと言っても過言ではありません。ボランティアは付加価値を創出する存在であり、活動の方向性を統一することが大切だと感じました。

ボランティアと接することが初めてだったため、最初はどこまでお願いしてよいのか、どこまで信頼してよいのかわかりませんでした。人間関係を構築するまでは、『説明会は来てくれたが、本番にドタキャンされないか』『初日の活動に満足がいらず、2日目も来てくれるか』などの不安がありました。しかし活動初日には、ボランティアの方に『無理をせずに頼ってほしい』などの声を掛けてもらい、開催後1週間もすると、『一緒に運営する仲間』と思えるようになりました」

この報告からも、スポーツボランティアが大会の価値をさらに高める役割を担っていることがわかる。

資料:日本スポーツボランティアネットワーク「ラグビーワールドカップ2019日本大会公式ボランティアプログラム『NO-SIDE』活動レポート」

## 3 スポーツボランティアの楽しみ方

### 3-1 スポーツボランティアのやりがい

ボランティア活動に参加する動機は人によって様々であり、そのやりがいも多岐にわたる。「人の役に立つ」という献身的な思考だけではなく、活動によってスキルを身に付けて自己の成長につなげることや、多種多様な人と交流して新たな人間関係を築くこと、自らの活動が社会に大きな影響を与えること等がある。スポーツボランティアを続けていく中で本来の参加動機とは異なる新たなやりがいを得ることもでき、それが他のボランティア活動への参加意欲の向上や、継続的なボランティア活動につながっていく。

スポーツボランティアのやりがいを感じる場面の事例として、下記にいくつかを紹介する。

- ・スポーツをする人・みる人の役に立てる
- ・世代や職業・経歴の異なる仲間ができる
- ・役割をまっとうする達成感を仲間と共有できる
- ・自身の専門性・特技を生かした活動ができる
- ・さまざまなスポーツと接することができる
- ・スポーツ以外のボランティア活動へも広がる
- ・新たなスキルを身に付けることができる
- ・社会が注目するスポーツイベントに、運営組織の一員として参加できる

ここに紹介した事例はごく一部である。スポーツボランティア活動を続けていく中で新たなやりがいを見つけながら、活動の幅も広げていってもらいたい。



### 3-2 チームとしてのスポーツボランティア

チームの定義は、「共通の目的や達成すべき目標、そのためのアプローチを共有した少数の集合体」とであるとされている。つまり、「仲間が思いをひとつにして、同じゴールに向かって進み、機能する」のがチームだといえる。

日本社会では、協調性が重視され、個より集団が尊重されることが多い。しかし、それは個の考えよりも多数の意見を重視するものであり、多数の意見と異なる者は排除されるといった集団文化である。しかしチームは単なる人の集まりや集団ではない。チームビルディングの考え方では、まず個が尊重され、多様な個を組み合わせた集団をチームとして機能させることに重点がおかれる。

現在、スポーツイベントや競技大会において、スポーツボランティアは必要不可欠な存在であるが、スポーツボランティアが一人ひとりで行動してもイベントは機能しないどころか、かえって運営の妨げになることさえある。しかしまた、個が失われた集団は、単なる人の集まりでしかない。スポーツボランティアがめざすチームは、単なる集団ではなく、個々が尊重された上で同じゴールをめざす人たちの集まりである。そして、単なる「集団」ではなく「チーム」として機能した時、スポーツボランティアの力は無限に発揮される。

どんな分野においても、同じ志を持った者が集い、仲間になることはすばらしい。特にスポーツボランティア活動体験者からは、活動に参加することですばらしい経験を得られたとの感想が多く聞かれる。

ボランティア活動には様々な人が参加するが、その立場は誰もが平等である。より多くの人々がスポーツボランティアに参加する機会を得て、普段の日常生活では得られない、たくさんのボランティア仲間を増やすことが期待できる。

#### Column III チームが機能するためには

RWC2019組織委員会・地域支部のスポーツボランティア担当者は、現場で実践されたボランティアが一体となった活動の様子を以下のように述懐する。

「ボランティアは自発的な活動のため、モチベーションがとても高いと感じます。難題に直面しても、問題を解決するためにメンバー同士で相談し合い、改善を重ねてくれます。ボランティアがいたからこそ、RWC2019の雰囲気を出しました。年齢も性別もバックグラウンドも異なる初対面の人々が、ひとつの目標に向かって力を結集し、大会を成功に導く総合力や集中力は、目を見張るものがありました。運営側がボランティアに支えられる場面は多く、まさに立場に関係なく皆で支えあう『TEAM NO-SIDE』の精神を体感できました」

神奈川・横浜会場は決勝戦が行われるなど、他の支部と比較して業務量が多かったが、スポーツボランティアが協力し合いながら活動することで、大会を成功に導くことができました。その過程では、メンバー同士が相談し、問題を解決しようとする姿勢が重要だったことがわかる。

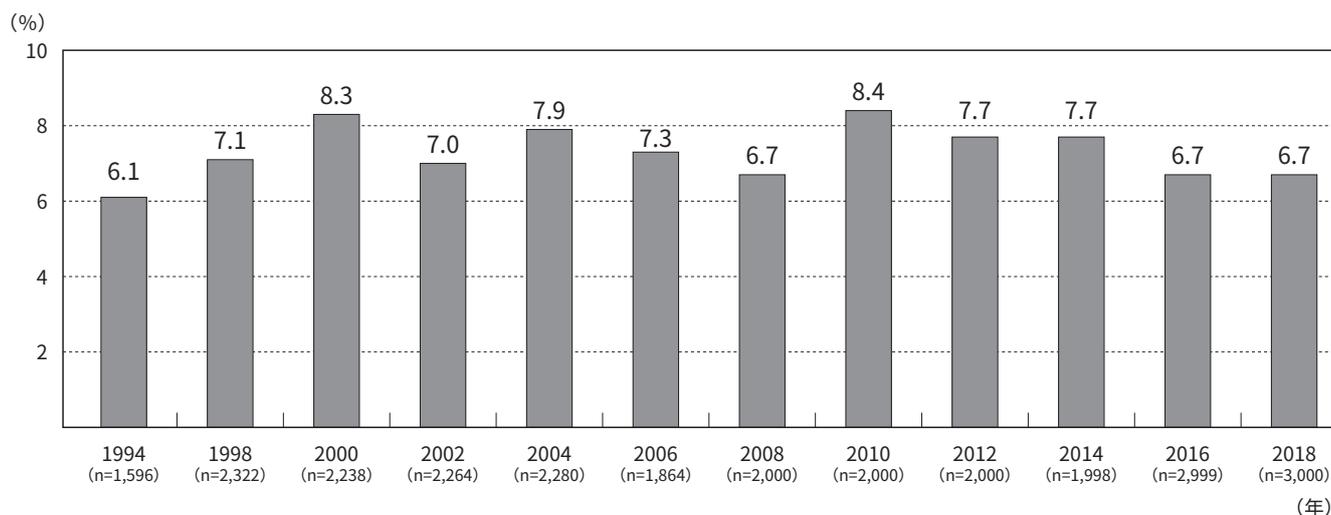
資料:日本スポーツボランティアネットワーク「ラグビーワールドカップ2019日本大会公式ボランティアプログラム『NO-SIDE』活動レポート」

# スポーツボランティアに関する社会状況

## 4 スポーツボランティアの統計

### 4-1 成人のスポーツボランティア実施状況

過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者は成人全体の6.7%で、2016年調査と同ポイントである。1994年からの経年で見ると、2010年で最高値となったが、過去20年間ほぼ横ばいの状況である。

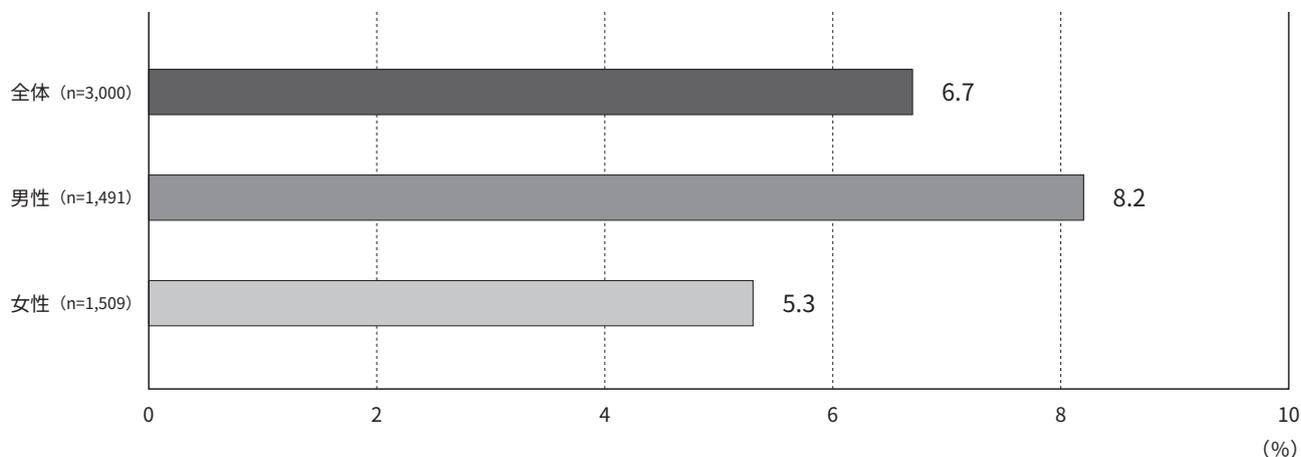


【図1】スポーツボランティア実施率の年次推移

注) 2014年までは20歳以上、2016年以降は18歳以上を調査対象としている。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

スポーツボランティア実施率を性別で見ると下のグラフの通り。男性が8.2%、女性が5.3%と、男性の方が女性よりも実施率が高かった。



【図2】スポーツボランティア実施率（全体・性別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

## ●スポーツボランティアの内容

下表には『日常的な活動』『地域のスポーツイベント』『全国・国際的なスポーツイベント』に大別した具体的なスポーツボランティアの実施内容を示した。

全体では『地域のスポーツイベント』における「大会・イベントの運営や世話」の実施率が35.8%で最も高く、『日常的な活動』の「団体・クラブの運営や世話」31.8%、「スポーツの指導」26.4%が続く。年間の平均実施回数は、『日常的な活動』の「スポーツの指導」が43.3回と最も多く、次いで『日常的な活動』の「団体・クラブの運営や世話」が25.0回、「スポーツ施設の管理の手伝い」が13.4回であった。

性別に見ると、男性は『日常的な活動』の「スポーツの指導」34.4%、「スポーツの審判」33.6%、『地域のスポーツイベント』の「大会・イベントの運営や世話」31.1%、女性は『地域のスポーツイベント』の「大会・イベントの運営や世話」43.0%、『日常的な活動』の「団体・クラブの運営や世話」40.5%、「スポーツの指導」13.9%の順であった。男性は指導や審判、女性は運営や世話の実施率が高い特徴がある。

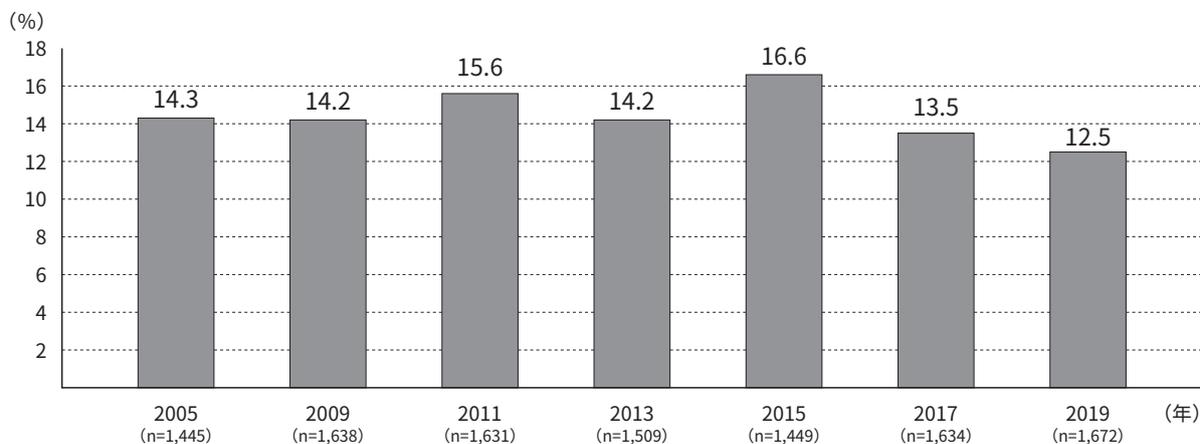
【表1】スポーツボランティアの実施内容

スポーツボランティアの内容		全体 (n=201)		男性 (n=122)		女性 (n=79)	
		実施率 (%)	実施回数 (回/年)	実施率 (%)	実施回数 (回/年)	実施率 (%)	実施回数 (回/年)
日常的な活動	スポーツの指導	3位 26.4	43.3	1位 34.4	42.4	3位 13.9	46.7
	スポーツの審判	24.9	11.1	2位 33.6	12.4	11.4	5.0
	団体・クラブの運営や世話	2位 31.8	25.0	26.2	16.4	2位 40.5	33.9
	スポーツ施設の管理の手伝い	7.5	13.4	9.0	18.0	5.1	2.0
地域のスポーツイベント	スポーツの審判	18.9	8.3	23.0	9.7	12.7	4.6
	大会・イベントの運営や世話	1位 35.8	3.3	3位 31.1	3.2	1位 43.0	3.5
全国・国際的なスポーツイベント	スポーツの審判	1.0	2.5	1.6	2.5	0.0	—
	大会・イベントの運営や世話	4.5	1.4	4.9	1.0	3.8	2.3

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2018

## 4-2 青少年のスポーツボランティア実施状況

過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者は青少年（12～21歳）全体の12.5%で、2017年調査と比べて1.0ポイント減少している。2005年からの経年で見ると、2015年に最高値となったが、2017年に3.1ポイント減少し、2017年から2019年はほぼ横ばいである。

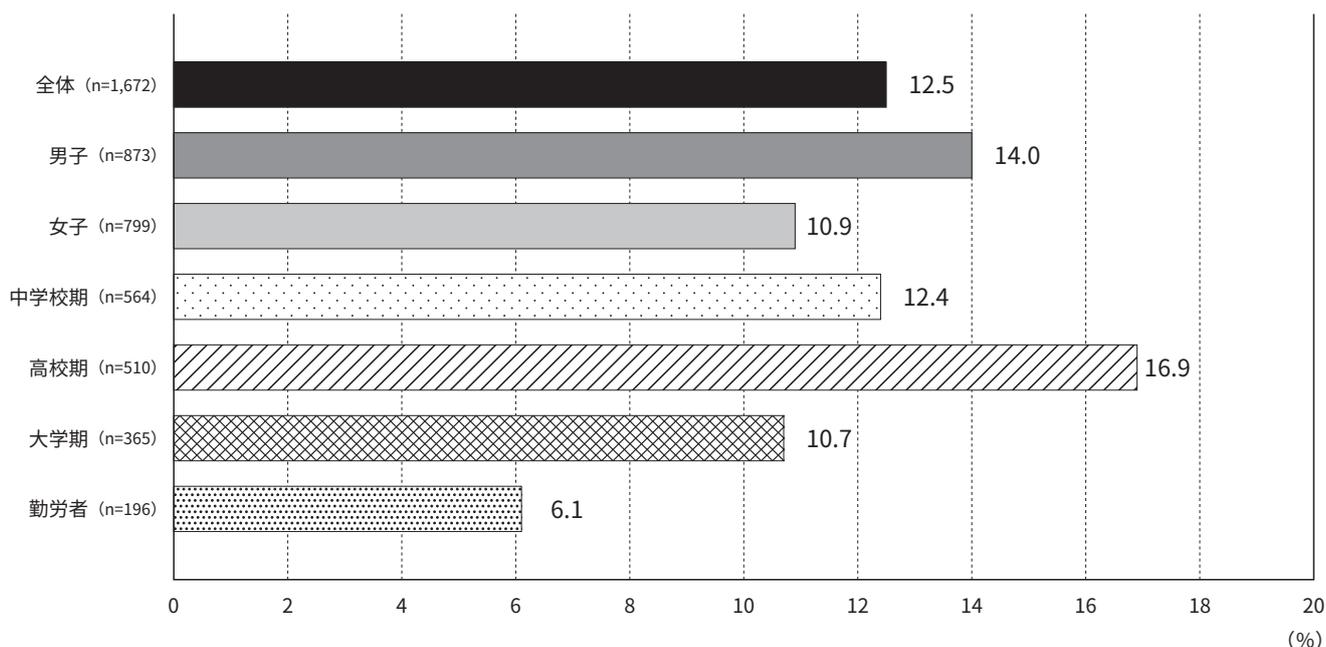


【図3】スポーツボランティア実施率の年次推移（12～21歳）

注）2005年～2015年は「10代のスポーツライフに関する調査」の12～19歳を分析対象とした

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

スポーツボランティア実施率を性別で見ると下のグラフの通り。男性が14.0%、女性が10.9%と、男性の方が女性よりも実施率が高かった。また、学校期では高校期が最も高かった。



【図4】スポーツボランティア実施率（12～21歳：全体・性別・学校期別）

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2019

### 4-3 スポーツライフの現状

スポーツには、「する・みる・ささえる」の3つの楽しみ方があるといわれる。「するスポーツ」は自らスポーツを行うこと、「みるスポーツ」はスポーツ観戦、そして「ささえるスポーツ」がスポーツボランティアのことを指す。成人と青少年を対象としたアンケートでは、年1回以上、「するスポーツ」を実施した人は70%以上、「みるスポーツ」を実施した人は30%を超えるが、「ささえるスポーツ」に関しては15%以下と、スポーツボランティアの実施率は低いことがわかる。

【表2】「する」「みる」「ささえる」スポーツライフの現状

		成人 (n=3,000)	青少年 (n=1,675)
するスポーツ	年1回以上実施	74.0%	78.3%
みるスポーツ	年1回以上の直接スポーツ観戦	31.8%	37.2%
ささえるスポーツ	年1回以上のスポーツボランティア	6.7%	12.5%

笹川スポーツ財団「スポーツライフ・データ 2018」「子ども・青少年のスポーツライフデータ 2019」より作成



・するスポーツ



・みるスポーツ



・ささえるスポーツ

## 5 スポーツボランティアと多様性

### 5-1 ダイバーシティ&インクルージョン

「ダイバーシティ&インクルージョン (Diversity and Inclusion)」は、アメリカにおける人種や女性に対する機会均等や差別是正から生まれた考え方であり、多様な人が集まり、その違いを受け入れて互いを尊重しながら生きる社会を表している。ダイバーシティは「多様性」、インクルージョンは「包括、包含 (包み込む)」と訳される。

日本でダイバーシティという言葉が使われ始めた頃は、「女性の活躍」という文脈で、多様な働き方の説明をするときに使われた。しかし本来のダイバーシティという言葉は男性と女性の違いに限らず、もっと広い意味を持っている。年齢、職業、社会経験、人種、文化等、多様性に富んだ一人ひとりを社会全体で受け入れることが真に重要なことである。つまり、人は皆、他人とは違うということを確認するだけでなく、その違いを皆で受け入れることも重要だと認識することが、ダイバーシティ&インクルージョンの考え方である。

ダイバーシティ&インクルージョンを実現するためのポイントは次の3つである。

- ①それぞれの「違い」を尊重し受け入れること
- ②「違い」を称える (価値を見つける) こと
- ③一人ひとりが活躍する機会を与えられ、また活躍できること

### ダイバーシティ&インクルージョン



## 5-2 スポーツボランティアにおけるダイバーシティ

ボランティア活動の現場は社会の縮図であり、そこには幅広い世代、学生や会社員、障害のある人やない人等多様な人が集まっている。互いの良さを尊重しながら一人ひとりがチームに貢献することが、まさにダイバーシティ社会の在り方と言える。

ボランティア間のダイバーシティは、活動自体をより良いものにする。たとえばチームでスポーツイベント会場内の案内という活動をしていたとする。チームのダイバーシティを生かし、それぞれのボランティアが自分の視点からの気づきを共有したならば、「口頭での説明に頼らず図面を使ってみよう」とか、「通路に小さな分かりにくい段差があるので声をかけて注意を促そう」と、気づきにくいポイントにも配慮することができる。

個々人の多様性への配慮は、多様であるがために、マニュアルへ一律に落とし込むのは難しいが、多様なボランティア仲間の気づきを集めれば、マニュアルを超えた“おもてなし”が可能となる。

## 5-3 ダイバーシティと障害者スポーツ

ダイバーシティが強く求められる場面のひとつが、障害者スポーツである。東京オリンピック・パラリンピックのビジョンに「一人ひとりが互いを認め合う（多様性と調和）」がある。スポーツは参加する選手、観客とボランティアが自然に交流する機会を生み出す。交流することによって相手への関心が芽生え、それが他者への理解と受容へと発展する。人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障害の有無、国籍、年齢、思想、職業、出身地、趣味等、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで、すべての人が自分らしく生き生きと暮らす社会の実現が期待されている。

障害者スポーツでは、障害のない人が行うスポーツ以上に一人ひとりの個性を尊重することが重要となる。障害によってそれぞれできること、できないことはあるが、ルールや使用する用具を柔軟に考えることにより、誰であっても活躍できる場をつくることができる。

ダイバーシティの基本概念を基にスポーツを考えることで、障害者とスポーツとのつながりが生まれるのである。

#### 5-4 障害者スポーツの起源

障害のある人たちのスポーツは、障害者の機能回復訓練として始まった。

ロンドン郊外のストック・マンデビル病院において、第二次世界大戦で負傷した傷病兵のために脊髄損傷病棟を開設。その責任者であったL.グットマン博士が、機能回復訓練（リハビリテーション）の手段としてスポーツを積極的に取り入れたのが、後にパラリンピックへと発展した。

日本においては、「日本パラリンピックの父」といわれる医師の中村裕が、1961年の第1回大分県身体障害者体育大会や1964年のパラリンピック東京大会の開催に尽力する等、障害者スポーツの礎を築いた。スポーツを通じて障害者の自立をサポートする思想は日本の障害者スポーツの在り方に大きな一石を投じた。

近年、スポーツが持つリハビリテーション効果が、身体的な機能回復のみならず、スポーツで自信や勇気を取り戻し、物事に積極的に取り組むようになる等、心理的な側面にもおよぶことが認識されるようになった。また、スポーツは、障害があることで孤独になりがちな障害者にとって、社会の一員としての自信を取り戻すための有効な機会であり、社会参加においても大きな効果があるともいわれる。

現在、スポーツは障害者の余暇活動として、また、社会参加の重要な機会として捉えられるようになってきている。



## 5-5 障害者スポーツの可能性

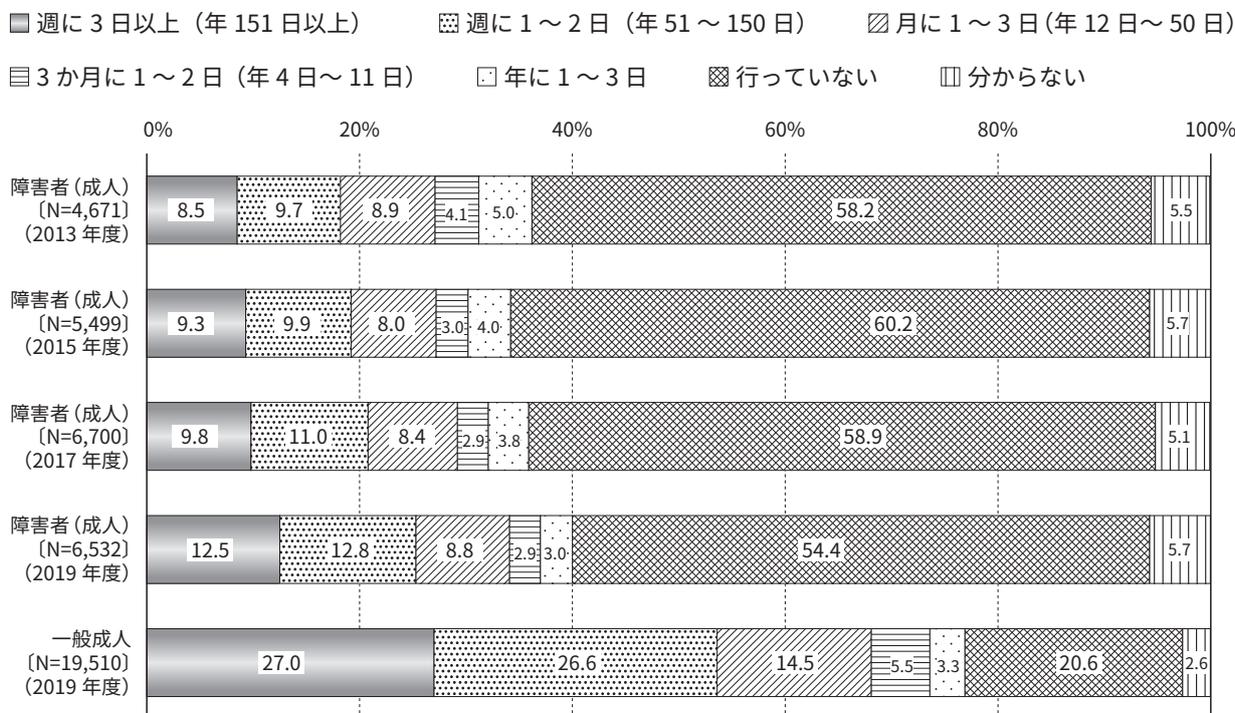
日本では、「障害者基本法」において、障害者を次のように定義している。

「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状況にあるものをいう」

内閣府「令和元年版障害者白書」によると、身体障害児・者、知的障害児・者と精神障害児・者を合計すると約936万人で、これは人口の約7.6%にあたる。およそ13人にひとりの割合となり、障害者が身近な存在であることがわかる。

2011年に施行された「スポーツ基本法」には、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と記されている。

障害のある人の中には身体を動かすこと自体が難しい人もいるが、身体を動かすことができる人にとって、スポーツは重要な余暇活動のひとつである。しかしながら、独立行政法人日本スポーツ振興センターが2019年に実施した調査によると、「週に3日以上」と「週に1～2日」を合わせた、「週1日以上」のスポーツ実施率では一般成人が53.6%なのに対し、障害者では25.3%であり、障害者は一般成人の半分程度となっている（下のグラフ）。障害のある人が、一般の成人に比べて、スポーツをしていない実態が確認できる。スポーツ基本法の施行後、こうした環境の改善が期待されているが、まだまだ、健常者のスポーツ環境に比べると改善点が多い。中でも、例えば障害があるために体育館までの移動が難しい、ひとりで練習することが難しいといった人にとって、スポーツボランティアによる支援は特に有効である。



【図5】過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数（成人）

※「一般成人」は、スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」（2019年度）より作成

資料：「スポーツ白書」2020

また、障害者がスポーツを楽しむためには、個々の障害者の身体の状態に合わせて、安全に配慮したスポーツ指導ができる人材が求められる。日本障がい者スポーツ協会では、障がい者スポーツ指導員の資格制度を設けて、こうした人材の養成に努めており、資格を持った指導員の多くがボランティアとして、地域で障害者のスポーツ活動の支援にあたっている。

日本社会では、障害のある人と無い人が日常的にふれあう機会が少ないが、障害者スポーツ大会は、障害のある人と無い人が出会う貴重な機会である。それ以上に、障害者の真の力を目の当たりにできる貴重な機会である。障害者スポーツの大会にスポーツボランティアとして参加し交流することにより、障害のある人たちを理解し、感動や友情を分かち合うことができる。また、「障害者は支えられる人」という固定概念がある中、昨今は障害者自らがスポーツボランティアとして活躍している。彼らの視点から他者への配慮の方法を学ぶことは多く、また障害の有無にかかわらず活動を共にすることで、互いへの理解を促進することができる。



## 5-6 障害者スポーツの国際大会

障害者スポーツの国際大会には、以下のものがある。

- 身体障害（肢体不自由、視覚障害）：パラリンピック
- 身体障害（聴覚障害）：デフリンピック
- 知的障害：スペシャルオリンピックス、パラリンピック

歴史的に見ると、障害別、あるいは競技別の障害者スポーツ組織は、徐々にパラリンピックという同一の競技会にまとまっていった。一方、パラリンピックに参加せず独自で国際大会を開催している組織が、デフリンピックとスペシャルオリンピックスである。デフリンピックは、1995年に国際パラリンピック委員会（IPC）を脱退しており、スペシャルオリンピックスもIPCには加盟していない。

デフリンピックは、1924年設立の「国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）」を前身とする最古の障害者スポーツ組織であり、聴覚障害者を競技者とする。2001年から、大会名と共に組織名も「デフリンピック」という名称を使用している。

スペシャルオリンピックスは、スポーツを通じた知的障害者の自立と社会参加を目的とする障害者スポーツ組織であり、競技会開催だけでなく、地域社会での継続的なスポーツトレーニングの機会を提供している。

なお、2000年のシドニーパラリンピック以降、パラリンピックへの知的障害者の門戸が閉ざされたため、国際知的障害者スポーツ連盟（INAS-FID）の主催によってグローバル大会が開催されるようになった（2012年ロンドンパラリンピックより、知的障害者の参加が再開）。また、障害者とは区別されるが、臓器移植者を競技者とした「世界移植者スポーツ大会」も開催されている。

パラリンピックは障害者の超エリートスポーツへと発展、名実ともに「もうひとつのオリンピック」である。なお、デフリンピックとスペシャルオリンピックスも、国際オリンピック委員会（IOC）が名称を認めた団体である。パラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックスはいずれも、夏季・冬季それぞれ4年に一度、世界規模で開催されている。

### ●障害の種類と国際スポーツ

	障害区分	障害	国際スポーツ大会	
障害者	身体障害	肢体不自由	機能障害	パラリンピック
			頸椎損傷	
			脊髄損傷	
			切断	
			脳性まひ	
	視覚障害	パラリンピック		
	聴覚障害	デフリンピック		
内部障害	無し			
知的障害			パラリンピック	
			グローバル大会	
			スペシャルオリンピックス	
精神障害（発達障害含む）		無し		
臓器移植者			世界移植者スポーツ大会	

【出典】(公財)日本障がい者スポーツ協会資料

# スポーツボランティアに必要なスキル

## 6 コミュニケーションスキル

### 6-1 アイスブレイク

スポーツボランティア活動の現場では、年齢、性別、社会経験、障害のある・無しにかかわらず様々な人たちが集まるため、豊かなコミュニケーション力が大切となる。コミュニケーションにおいて非常に大切なのが、他者を認め、理解する「他認の力」である。

どんなスポーツイベントであっても、参加するスポーツボランティアたちにとって第一の難関が、他のスポーツボランティアたちとの交流である。よいスポーツボランティア・リーダーがいれば、心地よい空間へと導いてくれるので、スムーズに交流が図れるが、リーダー役がない場合には、冷え切った空気が流れ続けることになりかねない。こうした事態を打開するのに必要なのが、「アイスブレイク」である。アイスブレイクとは、コミュニケーションにおいて温かいムードをつくり、冷え切った雰囲気を和らげることをいう。会場で初めて出会ったスポーツボランティアには、自ら「こんにちは！」と挨拶するだけで、アイスブレイクのきっかけとなり、後々、コミュニケーションがとりやすくなる。



#### アイスブレイクの目的

- ・ コミュニケーションのきっかけをつくる
- ・ 居心地の良い環境をつくる
- ・ 良好な関係性の集団をつくる

## 6-2 リーダーシップ

「リーダーシップ」といえば、組織のトップ等、限られた人が持つべきものだという風潮や、特定の間人が保有する特別な才能ととらえられることが多い。JSVNでは、リーダーシップを「チームを『引っ張る』働き」ととらえ、役割や権限に関係なく、全ての人が発揮すべきものと考えている。

リーダーがチームを「引っ張る」ことは多い。スポーツボランティアの現場でも、スポーツボランティア・リーダーがメンバーに活動の説明をしたり、役割分担等をしたりしながらチームを引っ張っていく。しかし、チームを引っ張るのはリーダーだけではない。メンバーは、スポーツボランティア・リーダーからの指示に先じて、活動の様子をイメージする等して、想定し得る事象への対策を取ることもできる。役割や権限に関係なく、チームを「引っ張る」働きは可能である。

一人ひとりが、自分は何をするためにそこにいるのか、そのために何をしなくてはならないのかを考え行動することこそがリーダーシップの本質である。ボランティアの語源が「志願兵」であるように、リーダーシップもまた、自ら志し、能動的に行動する、といったボランティアの本質と同様のものである。

## 6-3 フォロワーシップ

一般的にはフォロワー（メンバー）が集団の目的達成に向けてリーダーを補助していくこととして捉えられ、フォロワーシップはリーダーシップと対比された概念とされている。JSVNでは、フォロワーシップを「チームを『ささえる』働き」と考え、リーダーシップと同様に役割や権限に関係なく、すべての人が発揮すべきものと考えている。

具体的にチームを「ささえる」働きとは、メンバーがスポーツボランティア・リーダーのサポートをすることはもちろんのこと、チームの雰囲気を変えるためにほかのメンバーを鼓舞することや、メンバー同士の声かけ等がそれにあたる。

チームが機能するためには、役割や立場に関わらずそれぞれがリーダーシップとフォロワーシップの両面から活動を盛り立てていくことが大切であり、それによって活動は円滑に進む。

チームが機能するためには、スポーツボランティア・リーダーにすべてを任せてリーダーシップが発揮されるのを期待するのではなく、フォロワーがスポーツボランティア・リーダーに協力を示し、フォロワーシップとリーダーシップの両面から活動を盛り立てていくことが望ましい。

### Column IV リーダーシップがチームを機能させる

RWC2019組織委員会・地域支部のスポーツボランティア担当者は、経験豊富なスポーツボランティアが他のメンバーをリードする役割を担っていた様子を以下のように述懐する。

「イベントの雰囲気づくりは、ボランティアが担う部分が多いと思います。ボランティアの力でイベントが盛り上がれば、イベントは成功につながり、次回もボランティアに参加する人が増え、地域活性化につながります。

運営側の進行が完ぺきではなくても、大会成功に向けて努力している姿勢は、ボランティア（特にベテランボランティア）に伝わります。ベテランボランティアは、新しいボランティアを巻き込んで、イベントを華やかに彩ってくれます」

一人ひとりがリーダーシップを持ち、他のメンバーを「引っ張る」働きを担うことで、活動はさらに充実したものとなる。

資料:日本スポーツボランティアネットワーク「ラグビーワールドカップ2019日本大会公式ボランティアプログラム『NO-SIDE』活動レポート」

# 日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)について

## 7 JSVN について

### 7-1 設立意義と目的

日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)は、全国で活動するスポーツボランティア団体間のネットワークを構築し、ボランティアに関する情報の共有や協働事業を推進する特定非営利活動法人である。

スポーツボランティア文化の醸成を図り、国民の生涯にわたるスポーツ活動を通じた豊かな生活の形成に寄与することを目的に2012年に設立し、ボランティア募集及びボランティアの受入れ団体と情報を共有するコーディネート事業、ボランティアを育成する養成事業、ボランティアについて理解を深める周知・啓発事業の3つの事業を進めている。

現在では、スポーツボランティア団体のみならず、プロスポーツチーム、教育機関、行政、企業等、スポーツボランティア事業を継続的に運営する多種多様な団体が会員となり、ネットワークは全国に広がっている。

また、ラグビーワールドカップ2019やワールドマスターズゲームズ2021関西等の国際的大規模スポーツイベントとも連携し、JSVNが有するノウハウを広く提供している。

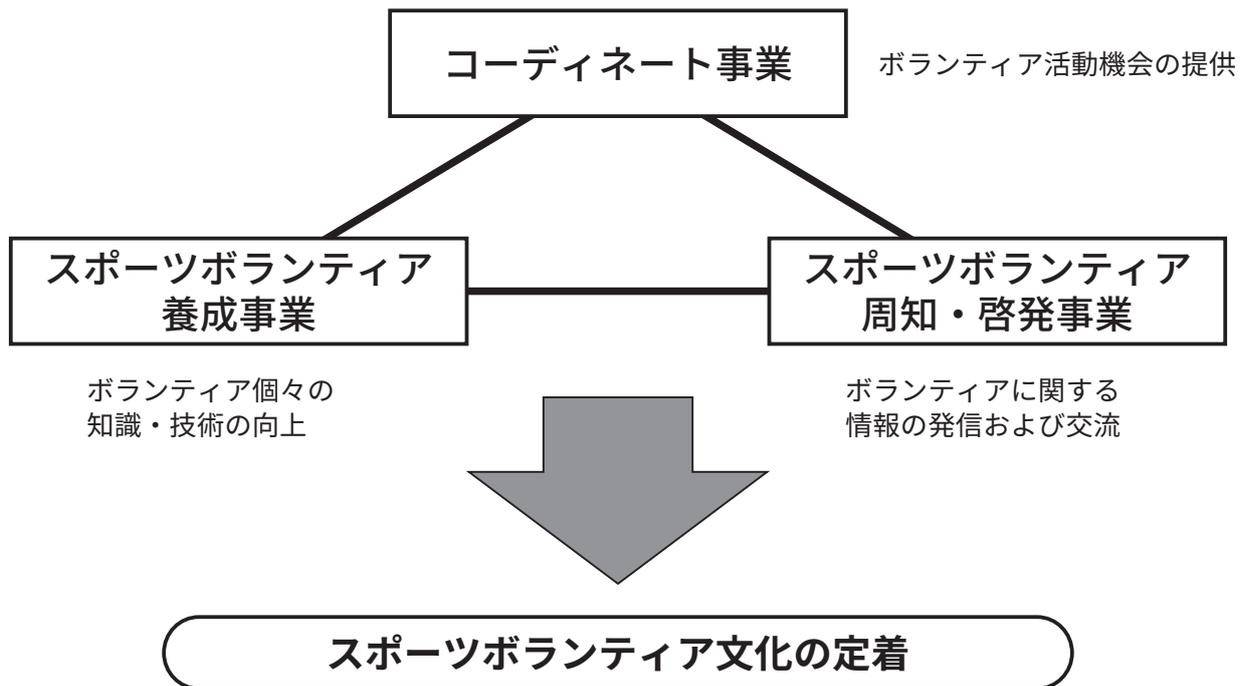


JSVNのシンボルマークは、手をつなぎ協力し合うことで「みんなで作る未来」を、弧を描く文字により「スポーツボランティア団体の団結」を、また、ボランティアの目指す姿という想いを込め「信頼の青」「協調の緑」「情熱の赤」で表現されている

## 8 主な事業

### 8-1 スポーツボランティア養成事業

JSVNでは、「スポーツボランティアのやりがいや楽しみ方を知る」から「ボランティア組織のサポート知識」まで、ステップアップ形式で構成した4つのプログラムを開催している。スポーツボランティアについての基礎を知ることから始め、知識を得ることで、一層活動が意義深く楽しいものとなる。また、受講者には、ボランティアスキルを向上させるためのスキルアップ研修会も開催している。2020年3月末までに、全国で415回開催し、延べ20,199名が受講している。



### 講習会の種別およびライセンス資格

**STEP 01** **スポーツボランティア研修会**  
スポーツボランティア活動のやりがいや楽しみ方を知る。

**STEP 02** **スポーツボランティア・リーダー養成研修会**  
活動時のまとめ役となるリーダーに必要な知識や技術を学ぶ。

**STEP 03** **スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会**  
主催者とボランティアをつなぐ役割を担うための知識を学ぶ。

**STEP 04** **スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会**  
ボランティア組織の運営をサポートするための知識を学ぶ。

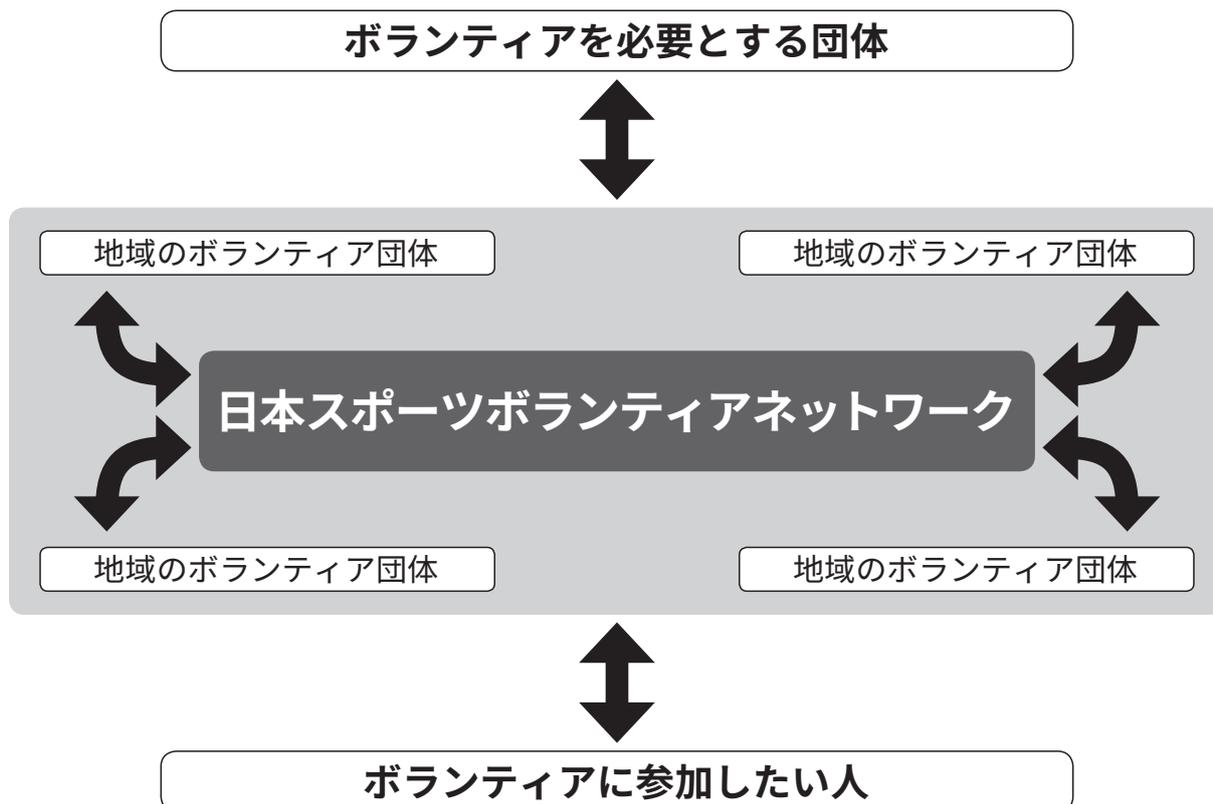
**ライセンス更新講習**  
各認定資格を継続するための更新プログラム。

**スキルアップ研修会**  
ボランティアスキルのさらなる向上のためのプログラム。

## 8-2 コーディネート事業

JSVNでは、「ボランティアを必要とする団体」と「ボランティアに参加したい人」をつなぐコーディネート事業を展開している。ボランティアを必要としている団体やイベント主催者から寄せられた情報を、JSVNが運営するスポーツボランティアに関するポータルサイト「スポボラ.net」に集約し、ボランティア活動の未経験者から、リーダーとして活動したい人まで、スポーツボランティアのための「参加する」「学ぶ」情報を提供し、活動の申し込みから参加までをサポートしている。

また、ボランティアと共にイベント等を運営することを検討している団体に対し、ボランティアの受入体制についてアドバイスも行っている。



## 8-3 スポーツボランティア周知・啓発事業

JSVNでは、スポーツボランティアの周知・啓発のため、各種イベントを開催している。スポーツボランティアに関わるそれぞれの立場の人たちが一堂に会し、活動報告や意見交換を行うことで相互を認め合い、これからのスポーツボランティアのあり方を見出し、広く社会に発信している。

また、ボランティアに関する調査やレポートの作成も行っている。

## 9 スポーツボランティア養成プログラムの概要

### 9-1 スポーツボランティア養成プログラム

名称	スポーツボランティア 研修会	スポーツボランティア・ リーダー養成研修会	スポーツボランティア・ 上級リーダー養成研修会	スポーツボランティア・ コーディネーター養成研修会
内容	スポーツボランティア活動に 必要な基礎知識	スポーツボランティア 活動の実践知識	スポーツボランティア活動に おけるチームビルディング	スポーツボランティア組織の 運営および安全管理
時間	2～3時間	1日(5.5時間)	2日(11.5時間)	2日(12時間)
ライセンス	ライセンスなし (修了証の交付)	スポーツボランティア・ リーダー	スポーツボランティア・ 上級リーダー	スポーツボランティア・ コーディネーター
受講資格 (全てを満たす者)	○中学生以上	○15歳以上 ○スポーツボランティア 活動の経験がある者 ○スポーツボランティア 研修会を受講・修了して いる者 (但し、本会の正会員団 体に所属するボランティア が受講する場合、正会員 団体からの申請によりス ポーツボランティア研修 会の受講を免除するこ とができる)	○18歳以上 ○スポーツボランティア・ リーダーのライセンスを有 している者 ○スポーツボランティア・ リーダーのライセンス取得 後1年以上を経過し、かつ 10日以上スポーツボラン ティア活動経験がある者 ○普通救命講習またはそ れに準ずる講習を受講し 有効期限内のライセンス を有している者	○スポーツボランティア・ 上級リーダーのライセンス を有している者 ○正会員団体に所属する ボランティアであり、正 会員団体が適任と認め 推薦する者
受講料	1,500円	3,000円	6,000円	6,000円
評価・ 判定	レポート	—	○	○
	受講態度	—	○	○
	面接	—	—	○
有効期限		取得日の次の3月31日 から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日 から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日 から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限

### 9-2 更新講習

名称	—	ライセンス更新講習
内容	—	スポーツボランティアの現状と社会認識およびそれぞれのライセンスに求める新たなスキル
時間	—	2時間程度
受講料	—	2,000円

### 9-3 講師・指導者制度

名称	—	准講師	講師
認定手続き	—	「上級リーダー」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者	「コーディネーター」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者
有効期限	—	上級リーダー有効期間に準ずる	コーディネーター有効期間に準ずる



■執筆（50 音順）

東 正樹

宇佐美 彰朗

工藤 保子

澤内 隆

園部 さやか

竹澤 正剛

綱島 浩一

二宮 雅也

渡邊 浩美

---

スポーツボランティア研修会 テキスト（2021 年 4 月版）

特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3F

TEL：03-6229-5620 FAX：03-6229-5621

URL：https://spovol.net E-mail：info@jsvn.or.jp

---

本テキストの内容を引用された場合、本書の引用であることを明記してください。

